

## 情報文化学に関する研究テーマ分析試論

### An analytic study concerning research themes of information-culturology

岡谷 大 Yutaka OKAYA

法政大学

Hosei University

#### 要 旨

情報文化学の情報空間モデルをベースに、主に「情報文化学会誌」に掲載された論文の多面的・進化的な特質をいくつか考察した：情報論、情報文化論、知的財産、言語論、表現論、日本文化論、リスクと安心・安全、コミュニティ・インフォマティクス、情報文化の実証的研究。以上の結果のいくつかを重点的に表にまとめている。本研究は今後グローバルな視点や、理論と応用の研究などが必要である。

#### Abstract

Based on the three dimensional model of information-culturological sphere, this paper tries to research the multi dimensional or developing nature of the title(theme) appeared on the Journal of the Information-Culturology such as: Infomatics,,information-culturology,intellectual property, linguistics,expression,Japanology, risk and safety,community informatics,empirical research of information-culturology. Those results are arranged in a table. This study should be supplemented by a global aspect or comparing between theory and practice.

#### 1. はじめに

すでに情報文化学会は創立20年を経過し、この間『情報文化ハンドブック』が出版され<sup>[1]</sup>、情報文化学の理念系・人間系・施設系による情報文化空間（片方モデル）をふまえた学術知の議論がなされてきた<sup>[2]</sup>。しかし『情報文化学ハンドブック』以後の総合的な情報文化学の論文等の紹介はなされておらず、現時点での一つのまとまりが欲しいところである。そこで本学会の本質、独自のテーマ、目的などはどこにあるのか、具体的にはその領域、概念、用語、理論モデル、などはどうかについて研究テーマを主軸に考察を試みた。

情報文化学会の目的は新しい世紀における情報文化の重要性を予見し、情報と文化を密接に関連づける学問領域の形成と知の再編成としての情報文化の体系化にある<sup>[3][4]</sup>。情報と文化という軋みあう関係、その中核をとらえることは難しいが、研究をすすめていくうちに一つの研究テーマに複数の視点があったり、あるいは一つのテーマが進化したりしていくという傾向がみられた。つまりテーマにおける「相互関係」という概念が見えてきた。これには理論的、社会的など多くの意味があるものと考えられる。そこでく会員のもっているであろう情報文化のイメージの摺合せというボトムアップ的なアプローチで本研究に取り組んだ。実際にはいくつかの仮説を立てこれまでの論文をふりかえってみた。『情報文化学ハンドブック』の領域区分を背景にまずは論文生産や引用、方法や目的などの量的検討を行い、次に内容に立ち入った。例えば複数の研究者によるテーマ、同一著者でもテーマの変遷がある場合などの整理を実施した。

#### 2. 先行研究

全体にテーマを横断する先行研究としては森田の研究がある<sup>[5]</sup>。これは情報文化学の一層の浸透、趣旨の理解、他機関との交流などを意図したもので、掲載論文の縦覧とあらたにいくつかの着眼点をのべている。独自の判断でいくつかの研究に焦点をあわせまとめており、大まかなくくりとして参考になる。一方で思考モデルに関しては基本的な枠組みと、それらをさらに深化させ非健常者などにも視点を向けた片方の柔軟な見解<sup>[2]</sup>、片方モデルによる森のベイジアンを用いたメディア効果と世論反応の考察<sup>[6]</sup>、八幡の情報文化の主体に関する論考<sup>[7][8]</sup>、情報文化空間をふまえた安岡の企業通貨の視点からの考察<sup>[9]</sup>、岡谷のオントロジーとターミノロジーを絡ませたの論考<sup>[10]</sup>などの考察の蓄積がある。さらには巻頭言など、節目ごとの学会の動向に関する論述も重要ではあるが、今回は参考するにとどめたい。

#### 3. 研究対象

本研究では学会誌の研究論文（招待論文を含む）を中心に必要と思われる研究報告、全国大会予稿集における論文を選び内容を検討した。巻頭言、提言、ニューズレター、学会賞や産業界との関連等は参考にしている。

#### 4. 研究方法

4.1 情報と文化にまたがる新しい視点のうかがえる論文を主とし、外国文献や外国を研究対象とした論文は割愛した。

4.2 引用では、図書館情報学の引用分析の手法(1)を使えば雑誌間、著者間、主題間の広がり、相互関連が表示できる。しかし件数が少なく今回はそこまでいわず、またガーフィールドの〈科学の地図〉の作業もできなかった。今回は主要な引用文献と自己引用（自分の論文の引用）と同誌引用（同じ雑誌での引用）の確認にとどめた。

4.3 テーマ分析でははじめに量的に、そのあと質的に視点やテーマの進化・発展の分析を行った。

4.4 5の主要テーマの選択においてオントロジーによる概念分析(分類)を行い、それに基づいてターミノロジー<sup>(2)</sup>による言語表現の調整すなわち特殊な言葉、同義語、略語、合成語、略語などを考察した。

4.5 以下の仮説を試みた。

(a) 当然のことであるが研究内容は片方論文やメディア関係、情報科学の論文を基に年々学際的になっていく。(b) 情報文化学には、通時的な変化がある。

## 5. 主要テーマの選択

以下に主要テーマの選択の第1ステップとしては、論文数などの客観的な量的側面から全体を俯瞰する。第2に『情報文化学ハンドブック』や「情報文化学会誌」によりテーマの概要を把握し、第3に横断複合的テーマ、進化・進展のテーマをとりあげる。

### 5.1 論文投稿について

学会誌に掲載された研究論文は、1994年から2012年まで合計で232件、年平均12.2件で、最も多かった年は12件、最低は3件であった。なお今回は参考程度にとどめたが、報告、レポート、国際会議報告などは合計64件であった。このほか資料、特別寄稿、レビュー、論文紹介などがあったが、今回は参考とさせていただいた。なおタイトルに現れた用語（ターミノロジー）として、例えば異表記（携帯とケータイ）、「場所性」といった特有の言葉、関連・類似語（文化の認知差、文化度）、合成語（多文化認識）、略語（VPN：virtual private network）などが注目された。

### 5.2 引用文献

自己引用（自分の論文の引用）、同誌引用（同じ雑誌での引用）が多い。特に多かったのは片方論文や『情報文化学ハンドブック』、メディア関連、情報処理学会の論文であった。個人名としてタイトルに現れたのはマクルーハン<sup>[11]</sup>、デューイ・リップマン<sup>[12]</sup>、Gordon Pask<sup>[13]</sup>などで、このほか文中ではバーリン・ケイ、ジンメル、水越伸などが見られた。

### 5.3 各論文で採られた研究方法

情報文化学を構築する主軸は、三つの系（理念系、人間系、

施設系）で示される。従って研究内容については、表1のように、それぞれの系に分けて示す。

(1) 理論研究では哲学、社会学、現象学的解釈学、言語系では言語論、意味論、情報系では基礎情報学、情報論理、情報システム、情報倫理、統計学、心理系では社会心理、コミュニケーション論、フロイト、ラカンなどの精神分析、さらに創作論・物語論などとして示すことができる。

(2) 調査・分析では文献調査のほかアンケート、インタビュー、ログ分析などが見られ、解析ツールとしてグラフ理論、多変量解析が多用されていた。一方テーマによっては文化人類学、変わったところではDNAや血液分析、臨床例の分析などが見られた。

(3) 現場実験・手法・提案ではVPNを用いたシステム構築や歩行支援システムなど弱者支援システムや介護システムなどが見られ、方法的には質問紙法などが見られた。

表1 研究方法

研究のタイプ	具体的な方法
(1) 理論研究内容	理念系： 哲学、情報哲学、解釈学的現象学、情報倫理、情報芸術学、情報理論、基礎情報学、情報システム論、統計学 人間系： 心理学、社会心理学、生理学、精神分析学、社会学、組織理論、文化人類学、文学、音声学、映像学、言語学、記号論、意味論、創作、発明、コミュニケーション理論 施設系： 通信、ラジオ、TV、コンピュータ、携帯電話、インターネット、AI、FA、OA
(2) 調査・分析	文献調査、アンケート、インタビュー、ログ分析、多変量解析
(3) 現場実験・手法・提案	質問紙法、DNA・血液型・臨床分析、システム構築、システム評価

### 5.4 『情報文化学ハンドブック』掲載論文と以降発表論文との比較考察

はじめにこれまで発表された論文のテーマの傾向と焦点をあきらかにしたい。『情報文化ハンドブック』をもとに、掲載された研究テーマと（カッコ内に）著者名を記し、その後に「情報文化学会誌」掲載のテーマを引用し、それらのテーマを多角的に比較・検討し考察を行うこととする。

まず思考モデルであるが、前述のとおり理念系・施設系・人間系に関してモデルの構造的・ダイナミックな研究（八幡）や、非健常者も含めた情報文化の主体の拡張（片方）、ベイジアンを用いたメディアの効果と世論反応の研究（森）などがみられた。

次に第1章情報文化学の基礎では全体を貫く根本原理、情報文化の基礎（片方）、情報の価値と生物および文化システムにおける適応概念（落合）、記憶と記録と情報文化（石川）などの研究がある。しかし、情報文化の構造や空間構造に関する研究は、情報文化の空間構造に関する試論<sup>[14]</sup>のような研究があるものの今後の課題である。このほか西垣の情報基礎論<sup>[15]</sup>は大きなまとまりをみせている。

第2章理念系では、情報メディアの文化に対する影響（山本・稲垣）、日本文化の情報処理（平澤）、情報文化と統計文化（橋本 勝）、生活情報の構造とその文化形態（三石）などがある。学会誌では情報倫理（曾我等）<sup>[16]</sup>や心理学、社会心理学的研究がみられた。

第3章人間系では、カルチャウエアと現代文化（今井）、コミュニティウエアと参加型メディアの論考（稲垣）などがあつた。

第4章施設系では文明のネットワーク史観（稲垣）、電子図書館システム（石川徹也）、情報センターとアウトソーシング（増田隆昭）など多くのシステムが紹介されている。学会誌ではVPNによる地域ネット結合（加藤）<sup>[17]</sup>、情報伝送上の誤り符号検出に関する研究（柴木・片方）<sup>[18]</sup>がみられる。アントコロニー最適化法のためのAnt言語の開発（飯村）<sup>[19]</sup>は、情報文化学の新しい道を開拓している。このほか、コンピュータ言語の研究も何度か試みられている。

前述のように、情報文化学の構築の主軸は、理念系、人間系、施設系の三つの系であるが『情報文化学ハンドブック』においては、編集上の理由で、以下のように、社会系、デジタル経済系などのように系を多用しているが、これらの系は前述の三つの系と同列にあるものではない。

第5章社会系では、情報社会イメージ論や（近）、中規模情報環境のモデル化とその基本理念（田中芳彦）、ネットワーク上の電子的著作権管理システム（鈴木・横井・安田）があげられている。このほか学会誌では最近では地域社会の研究がみられる。地域のとらえかたや民学産公の情報都市づくり（清原）<sup>[20]</sup>などがある。

第6章デジタル経済系では情報文化と社会経済システム（増田祐司）、デジタル経済とグローバルネットワーク（須藤）、インターネットと電子商取引が創り出す情報文化（成沢）、CALSと企業経営の革新（金山）などがみられた。学会誌ではプロシューマ型商品開発（加藤・横井）<sup>[21]</sup>、財政状態格差と自治体経営病院の資本構造（藤本・坂本）<sup>[22]</sup>、電子マネー（安岡）<sup>[9]</sup>、eコミュニティにおけるソーシャル・キャピタル（河井）<sup>[23]</sup>、後述するブランディング（設楽・桑原）<sup>[24]</sup>、新ケインズ派モデルと情報の経済学（村館）<sup>[25]</sup>、知的財産権担保融資（沢本）<sup>[26]</sup>、経済学からみた音楽著作権（樺島）<sup>[27]</sup>などがある。

第7章表現系では先端芸術としての情報造形（河口）、『バーチャル明治村』の開発（中田）、プラネタリウムでのインターネットとCGの活用（毛利）、コンピュータを使う造形（橋本創造）がみられた。学会誌では、パブリックビューイング、スポーツ消費に関する研究がみられた（西尾）<sup>[28]</sup>。

第8章教育系ではコンピュータを用いた教育への応用で、

情報文化学を指向した情報教育の考え方（栗本）、地域の教育力と音楽教育（中西）、情報と教育システム（竹本）などがみられた。学会誌では企業における自律型人材育成プラットフォームの構築（大嶋）<sup>[29]</sup>、職業教育における情報セキュリティ授業（青山）<sup>[30]</sup>その他がみられた。

第9章メディア系では、メディアの革新（正木）、これからの新メディアと情報文化（下生・渡辺）がみられた。今日携帯電話やSNSなどメディアの進化、多様化はいうまでもない。情報環境の変化は、情報文化学に大きな影響を与えている。ただし情報文化学の本質が変わるところはない。以下の考察によってさらに踏み込んで情報文化の本質は何かを探りたい。

## 6. 三つの系を視座にしたテーマの考察

5.4の分析からも新しいテーマと古いテーマとのつながりや傾向の把握が可能であるが、本節では学際的な視点から、これらを横断する多元的複数の視点やテーマの変化を追求し、さらに分析を試みる。仮説からもできるだけ今日までの複数の視点の論文を収集し、広い視野で主要なテーマをひろいあげてみたい。

### 6.1 情報論（理念系）

生物学による適応を背景とした情報の価値（落合）<sup>[31]</sup><sup>[32]</sup>、情報文化における曖昧性、主観的判断のアルゴリズム化（片方）<sup>[33]</sup>、記憶と記録と情報文化（石川）<sup>[34]</sup>、小島勝治の統計文化と大衆文化（橋本）、視点変換実験による身体変容<sup>[35]</sup>、電車内の携帯使用のアンケートに基づく環境変容（石川）<sup>[36]</sup>、異文化共存（落合）<sup>[37]</sup>、などがあげられる。

### 6.2 情報文化論（理念系）

「情報文化における理念系・施設系・人間系の関係性」の研究<sup>[7]</sup>から「情報文化の空間構造に関する試論」<sup>[14]</sup>まで八幡は情報文化の理論展開に意欲的なテーマを選び研究にとりくんでいる。稲垣の「情報文化学的新産業創生論」<sup>[44]</sup>「日本人のマクロ情報学」<sup>[47]</sup>は、情報文化論に位置づけることのできるテーマである。

### 6.3 知的財産（理念系）

情報文化学の理念系は真・善・美・理を基本としているが、人間の創造的活動は、上記の基本事項の探求から生まれる。これらに共有するのは、情報価値の創出であり、著作・特許・ブランドなどの知的財産として位置づけられる。知的財産に関するテーマは少なくない。たとえば近年の著作権の強化について、種々のひずみが累積しつつあること（稲垣）<sup>[43]</sup>などがそれである。また、特許マップなどいくつかの特許戦略などと産業育成について（稲垣）<sup>[44]</sup>、知的財産権を担保設定し融資を行う動きの考察などがある（沢本）<sup>[26]</sup>。加えていえば、技術的（ハード的）には種々の発想支援システムが構築されている。ブランドもまた知的財産として、注目されるようになった。ブランドは組織文化、威信とも絡むテーマであり、価値や欲望に関係する

ものと思われる。地域ブランドでは、マイクロ・マーケティング、マクロ・マーケティング、ブランド理論を分類し、地域ブランドに焦点を合わせた理論を構築している（徐・内田）<sup>[53]</sup>。一方「物語」が生活者の好感度および購買意欲の影響を明らかにした研究が注目される（設楽・桑原）<sup>[24]</sup>。

#### 6.4 言語論（人間系）

情報と言語は情報文化の世界でも重要な意義を持っている。言語や言語学の一部としてのターミノロジー学（岡谷）<sup>[10]</sup>、歴史のオントロジー（石川徹也）<sup>[38]</sup>、経済活動がグローバル化するにつれて、企業は多言語文化重視という大目標をもたなければならず、特に EC（電子商取引）の普及は多言語文化に貢献するという（稲垣）<sup>[39]</sup>。また言語工学という分野がハード的（機械系）なバックボーンをなしている。

#### 6.5 表現論（人間系）

研究テーマとして文芸のテーマでは、とくに俳句を取り上げているのが注目される。インターネット英語俳句やデジタル俳画を利用した異文化交流における創造的教育学習法（磯本）<sup>[40]</sup>、授業句会における学習者の意識（松永・濱野）<sup>[41]</sup>などが挙げられる。最近ではオートポイエティックシステム論にもとづく俳句分析、新傾向俳句、伝統俳句の基礎情報学的考察（大井）<sup>[42]</sup>がある。関連して前述の Gordon Pask 会話理論などが見られる（橋本）<sup>[13]</sup>。河口の「表現と科学の生命宇宙」<sup>[58]</sup>は、本学会誌ならではの注目すべきテーマである。

#### 6.6 日本文化論（人間系）

日本文化論は以前から継続しているテーマでもある。日本文化圏の深層（平澤）<sup>[46]</sup>、日本文化の認知差（平澤）<sup>[46]</sup>、日本人のマクロ情報学（稲垣）<sup>[47]</sup>、などが挙げられる。異文化共存では情報化やグローバル化を契機として、世界の新たな理解を求めている。理論的には文化人類学、方法的には多変量解析、テンドログラムなどを用いた実証的な研究がみられる。関連して情報社会ネットワークにおける文化差は解釈学的現象学、つまりテキストの内容による社会的な意味、現象を考察するものである（陳・桑原）<sup>[48]</sup>。

#### 6.7 リスク、安心・安全（理念系・人間系・施設系）

リスクと安心・安全は対概念である。リスクは今日の環境問題など切実である。リスクに関しては、経営学からのリスク・マネジメント（ナレッジ・マネジメント）として、企業内投下資本において情報システム（機械資本）と人的資本（知的資本）のコンビネーションが有効でなければ企業リスクが発生するという（辻本）<sup>[49]</sup>。またリスク・コミュニケーション空間の市場への拡張においては、国家（政府・行政）は（リスク管理の）選択肢の幅を示せばよく、具体的な選択肢の提供は企業が行えばよいとする（小川）<sup>[50]</sup>。一方で食産業、トレーサビリティといったコンセプトによるビジネスモデルの変革が論じられている（高橋）<sup>[51]</sup>。実学的成果としては、「水産加工食品向けトレーサビリティシステムの開発」（竹野他）<sup>[59]</sup>があり、ま

た安心・安全かつ新鮮な農産物を供給するシステムの、情報文化の構造（理念系・人間系・施設系）をふまえた構築もおこなわれている（下川原他）<sup>[52]</sup>。

#### 6.8 コミュニティ・インフォマティクス（理念系・人間系・施設系）

遠山は、国際的研究領域となっているコミュニティ・インフォマティクスを、主に地域コミュニティの社会・文化の活性化について、社会的アプローチから理論化を試み、実践を対象とした調査研究をテーマにしている。ここから ICT 利活用の在り方を明らかにしている（図 1, 図 2）。以前の地域アート創作プロジェクト<sup>[54]</sup>から場所性<sup>[55]</sup>の概念へ、さらに社交のデザインへと研究テーマを深めてきた<sup>[56]</sup>。ある地点の「空間」を「場所」へ転換するには、親密な経験などの意味付与が関わるといふ。また「社交」とは、ジンメル等の理論を背景に、社会関係資本を構築するときの地域住民間の相互作用の中核をいい、地域 SNS における社交の成立について検証している。ここには地域に関する考え方の変容・展開がみられる。

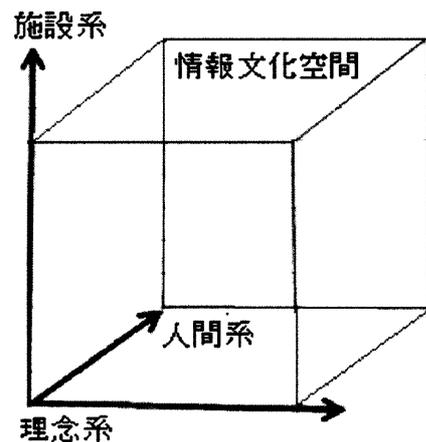


図 1 情報文化空間のモデル

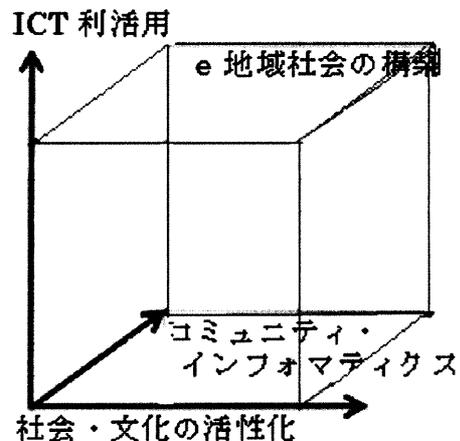


図 2 e地域社会の構築

#### 6.9 情報文化学の実証研究（理念系・人間系・施設系）

「情報文化空間からみた企業通貨の実証的研究」（安岡）<sup>[9]</sup>は、複合的なものの融合した一体化した情報空間をもとに、企業通貨の課題を示し、その解決の方向性を考察している。「知的イ

ンフラストラクチャーの構想・情報文化的存在としてのインターネット」(天野他)<sup>157)</sup>では、インターネットは、情報科学が創り出した「もう一つの社会」であり、情報文化の立場から論じられるべき存在となっているという。インターネットの自浄作用やインターネットに知性を持たせることなどを論じている。

## 7. 考察

本研究ではすべての論文に当たったわけではなく、またテーマの抽象的な論文もあったが、対象となった論文は情報化時代の流れにあって理念系、施設系、人間系、社会系などの相互関係を意識しているものと思われた。以下に主な考察を述べる。

### 7.1 量的分布, 質的内容, 方法,

引用に関しては引用分析に耐えるほどの文献はなかったが、片方論文や著書、マクルーハンなどのメディア関係、情報処理関係などは仮説どおり広く引用されていた。さらに展開すれば著者の所属学会の調査、メディアなど隣接学会の論文の検討なども面白いのではないかと思われた。

### 7.2 領域区分とテーマの変化

仮説通り内容が複雑化し、新しいテーマもみられた。理念系としての哲学、倫理、人間系と社会系の不離なことや、施設系の理論的・实际的掘り下げなどが課題となる。さらにコンピュータに直接関わらない論文をどうみるかや、行政関係も今後研究を深めるべき分野である。

### 7.3 テーマの選択・分析

論文選択が適切だったのかどうか、とりあげた個々の論文の目指すベクトルが同じだったかどうか、あるいはもっと多くのテーマとむすびついたのではないかなど反省材料は多い。ともかくも<言語, リスク, ブランド>など多面的なテーマと、<地域アート→場所性→社交>などの進化・進展するテーマ、さらに今後深めるべきテーマとして<スピリチュアルと情報, 精神分析, 社会のいろいろな場面での人間関係, 精神分析とメディア>などが明確になった。図3に以上をまとめた。

## 8. おわりに一むすびと展望一

今回は情報文化学の総合的な研究の第一歩としてこれまでどういう研究がなされてきたのかをみるために、『情報文化ハンドブック』掲載論文とそれ以後のおもに「情報文化学会誌」の論文の俯瞰を試みた。基本的なスタンスとしては批判的ではなく論文の傾向をできるだけ客観的にとらえたいというものであった。しかし今回検討したテーマは全てというわけではなく、また専門的で今回は理解の及ばないテーマもいくつかあった。しかし主要なテーマは描き出せたのではないかと、またこれまであまり紹介されなかった論文も紹介できたのではないかとと思われる。

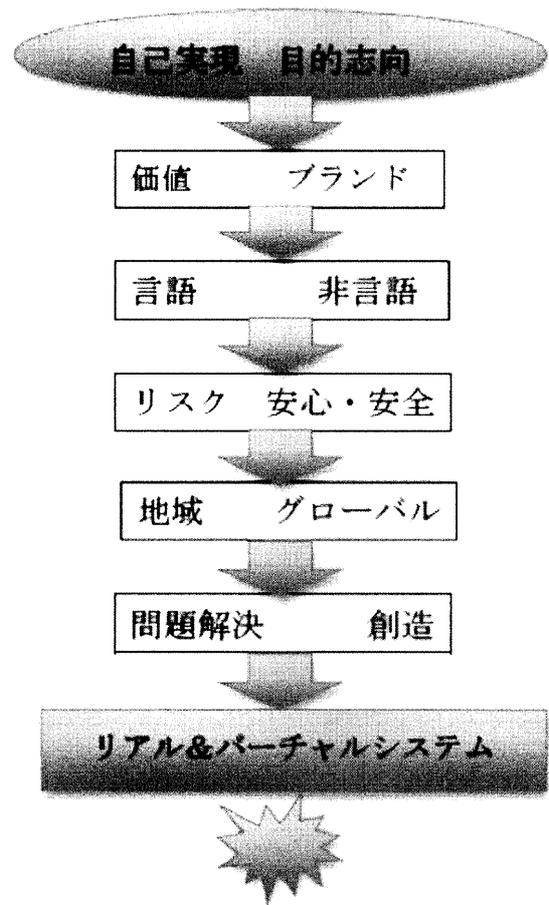


図3 情報文化学の主要なテーマ

具体的な結論として (a) 方法的には複雑さを増している、(b) 領域にまたがるテーマとして<情報論, 情報文化論, 知的財産, 言語論, 表現論, 日本文化論, リスクと安心・安全, コミュニティ・インフォマティクス, 情報文化学の実証的研究>などが浮かび上がった。

また進化・発展したテーマとして、<地域アート創作→場所性→webによる社交のデザインなどe地域社会の構築>などが明確になった。コンピュータに関連しない研究の中には、今後コンピュータとの関連で再考することも新しいテーマになると考えられる。

さらに今回ふれられなかった領域として、思考モデルに関して引き続きの研究が必要に思われ、とくに発想の局面の掘り下げが必要であると思われる。行政面についてはさらに研究する必要があり、今回取り上げなかった論文や、予稿集の検討、理論と産業界との関係、タイ、中国、韓国、フィリッピン、インド、イギリス、アメリカなどのグローバルな研究、またこうした異文化の共存や時系列を組み込んだ経年研究が必要である。

### 謝辞

本研究に関して情報文化学の学術知に立脚して終始ご指導ご鞭撻をいただきました片方善治名誉会長に心より感謝申し上げます。

## 注

- (1) 図書館・情報学の一分野で、E.Garfield は引用 (citation) の頻度を指標として各学問分野における雑誌、著者、主題間の相関図を作成したり(科学の地図)、核となる雑誌、著者、主題を抽出できるという。
- (2) ターミノロジー学とは E.Wuester によって創始され、概念における全体-部分、部分関係(オントロジー)などをもとに、同義語、略語、合成語、新語などを分析・調整する理論と実際である。ターミノロジー学(用語法)によって、多言語辞書の作成(Web辞書も含む)、翻訳特に自動翻訳や情報検索、議論の正確さが期待できる。

## 参考文献

- [1] 片方善治監修:『情報文化ハンドブック』, 森北出版 (2001)
- [2] 片方善治: 情報文化における思考モデルの考察, 情報文化研究, 4, pp.3-7(2005).
- [3] 片方善治監修:『情報文化ハンドブック』刊行の辞, IN:『情報文化ハンドブック』, 森北出版 (2001)
- [4] 片方善治: 人類の情報文化に向けた学会活動を目指して, 創立10年記念フェスタ, pp.5-6, 情報文化学会.
- [5] 森田富士男: 情報文化の構造(空間モデル)の適用に関する視座, 情報文化講演予稿集, 19, pp.34-38(2011).
- [6] 森一将: 情報文化におけるメディア効果と世論反応の考察, 情報文化学会誌, 14(1), pp.25-31(2007).
- [7] 八幡耕一: 情報文化における理念系・施設系・人間系の関係性, 情報文化学会誌, 16(1), pp.14-23(2009)
- [8] 八幡耕一: 情報文化の主体を眺める視座, 情報文化学会誌, 17 (2), pp.7-14(2010).
- [9] 安岡寛道: 情報文化空間からみた企業通貨の実証的研究, 情報文化学会誌, 14(2), pp.19-26(2007)
- [10] 岡谷大: オントロジー/ターミノロジーとレーダーチャートによる情報文化空間表現に関する論考, 情報文化学会誌 14(2), pp.40-45(2007).
- [11] 柴田崇: マクルーハンとサイバネティクス, 情報文化研究 3, pp.21-29(2005).
- [12] 河野昌広: 情報文化へのコミュニケーション論的アプローチ-リップマン-デューイ論争を出発点として, 情報文化研究 2, pp.19-23(2003).
- [13] 橋本渉: Gordon Pask 会話理論の現代的意義, 情報文化学会誌, 17(2), pp.14-22(2010).
- [14] 八幡耕一: 情報文化の空間構造に関する試論, 情報文化学会誌, 19(2), pp.13-17(2012)
- [15] 西垣通: 文化と文明, そして情報, 情報文化学会誌, 16(1), pp.3-7(2009)
- [16] 曾我千亜妃・井上寛雄・清水高志・米山優: サイバースペースにおける相互的修習, 情報文化学会誌, 15(2), pp. 25-32 (2008).
- [17] 加藤隆: 地域ネット結合 PC グリッドを想定した投機実行式大規模数値計算法の発, 情報文化学会誌 16(1), pp.23-32 (2007).
- [18] 柴木恒一・片方善治: 情報伝送上の誤り訂正能力の比較検証, 情報文化学会誌, 16(2), pp.38-44(2007)
- [19] 飯村伊智郎: アントコロニー最適化法のための Ant 言語の開発, 情報文化学会誌, 14(2), pp.6-11, 2007
- [20] 清原慶子: 民学産公の協働による情報都市づくり, 情報文化学会誌, 15(2), pp.3-8(2008).
- [21] 加藤智也・横井茂樹: WEB を活用したプロシューマ型商品開発に関する考察, 情報文化学会誌, 18(2), pp.43-53(2002)
- [22] 藤本孝一郎・坂本眞一郎: 財政状態格差に関する財務情報と自治体経営病院の資本構造, 情報文化学会誌, 9(1), pp. 76-85 (2002).
- [23] 河井孝仁: e コミュニティによるソーシャル・キャピタルの構築, 情報文化学会誌, 13(1), pp.42-48(2006)
- [24] 設楽剛・桑原武夫: ブランディングにおける物語効果, 情報文化学会誌, 18(1), pp.42-52(2011).
- [25] 村館靖之: 新ケインズ派モデルと情報の経済学, 情報文化学会誌, 18 (2), pp.19-27 (2011) .
- [26] 沢本吏永: 知的財産権担保融資の意義と課題, 情報文化研究 3, pp.73-81(2005).
- [27] 樺島栄一郎: 経済学からみた音楽著作権及び著作隣接権使用料徴収方法についての考察, 情報文化学会誌, 8(1), pp.61-71 (2001).
- [28] 西尾祥子: パブリックビューイングにおけるパブリック性とはなにか, 情報文化学会誌, 18(1), pp.28-34(2011).
- [29] 大嶋淳俊: 企業における自律型人材育成プラットフォームの構築に関する一考察, 情報文化学会誌 15(1), pp.54-61(2008).
- [30] 青山幸太: 職業教育における情報セキュリティ授業の一実践, 情報文化研究 4, pp.22-28(2005).
- [31] 落合洋文: 情報文化への理論的アプローチ 1, 情報文化学会誌, 4(1), pp.11-17(1997).
- [32] 落合洋文: 情報文化への理論的アプローチ 2 情報の価値を評価するための理論と手法, 情報文化学会誌, 9(1), pp.28-36 (2002).
- [33] 片方善治: 情報文化における漠然性と曖昧性, 情報文化学会誌, 2(1), pp.20-25(1995)
- [34] 石川幹人: 記憶と記録と情報文化, 情報文化学会誌, 6(1), pp.11-19(1999).
- [35] 水本正晴・竹林暁・石川幹人: 情報メディアによる身体性の変容, 情報文化研究 8(1), pp.11-21(2001).
- [36] 石川幹人: メディアがもたらす環境変容に関する意識調査, 情報文化研究, 7(1), pp.11-21(2000).
- [37] 落合洋文: 情報社会に関する人類学的考察: 異文化共存の意義と条件, 情報文化学会誌, 7(2), pp.3-11(2001).
- [38] 石川徹也: 歴史知識 Ontology 構築の研究, 情報文化学会誌 15(1), pp.6-12(2008)
- [39] 稲垣耕作: 情報ネットワーク社会における多言語文化, 情報文化学会誌, 6(1), pp.3-11(1999).
- [40] 磯本征雄: インターネット英語俳句・デジタル俳画を利用した異文化交流における創造教育学習法, 情報文化研究, 2, pp.41-47(2003).
- [41] 松永公廣・濱野正美: 授業句会における学習者の意識に関する調査, 情報文化学会誌, 7(1), pp.49-57(2000).
- [42] 大井奈美: 新傾向俳句・伝統俳句の基礎情報学的考察, 情報文化学会誌, 19(1), pp.7-16(2012).
- [43] 稲垣耕作: 情報社会における著作権制度の諸問題, 情報文化学会誌, 17(1), pp.3-11(2010).
- [44] 稲垣耕作: 情報文化的新産業創生論, 情報文化学会誌, 16(2), pp.3-12(2009).
- [45] 平澤洋一: 日本文化圏の深層, 情報文化学会誌, 18(1), pp.52-60 (2011).
- [46] 平澤洋一: 日本文化の認知差, 情報文化学会誌, 2(1), pp.45-54 (1995).
- [47] 稲垣耕作: 日本人のマクロ情報学, 情報文化学会誌, 18(2), pp.19-27(2011).
- [48] 陳怡廷・桑原武夫: 情報ネットワーク社会における文化差, 情報文化学会誌, 13(1), 80-85(2006).
- [49] 辻本篤: リスクマネジメントと企業の組織, 情報掘課程, 9(1), pp.104-113(2002)
- [50] 小川晴也: リスク・コミュニケーション空間の市場への拡張, 情報文化学会誌, 15(2), pp.40-49(2008).
- [51] 高橋浩: 食産業における“食の安全・安心”を契機としたビジネスモデル変革, 情報文化学会誌, 13(1), pp.11-20(2006).
- [52] 下川原健, 竹野健夫, 堀川三好, 菅原光政: 農産物産地直売所における入荷・販売計画作成システムの構築, 情報文化学会誌, 19 (2), pp.3-10 (2012)
- [53] 徐在完・内田純一: 地域ブランド理論の確立へ向けて, 情報文化研究, 3, pp.65-73(2005).

- [54] 遠山茂樹：地域アート創作プロジェクトとプロジェクト型学習について，情報文化学会誌 10(1),pp.31-39(2003).
- [55] 遠山茂樹：コミュニティ・インフォマティクスにおける”場所性”の創出と Web-GIS，情報文化学会誌 ,13(2),pp.27-34 (2006).
- [56] 遠山茂樹：社交をデザインする，情報文化学会誌 18(1),pp.11-19(2011).
- [57] 天野真家・稲垣耕作・三浦康之：知的インフラストラクチャーの構想—情報文化的存在としてのインターネット，情報文化学会誌 15(2),pp.17-25(2008)
- [58] 河口洋一郎：表現と科学の生命宇宙，情報文化学会誌，17(2),pp.3-7(2010)

- [59] 竹野健夫・堀川三好・岡本 東・植竹俊文・菅原光政：水産加工食品向けトレーサビリティシステムの開発，情報文化学会誌 14(1),pp.18-25,2007

#### 著者紹介

##### 岡谷 大（おかや ゆたか）

東北大学教育学部教育学科 卒業，博士（学術），法政大学兼任講師，本学会理事，専門は，図書館・情報学，ターミノロジー学，哲学